

全日本柔道連盟理事・東海大教授

やました やすひろ
山下 泰裕

私の視点

siten@asahi.com



◆中学での武道必修化

「和の心」を育てよう

理念は、平和な社会を築くことを希求し、広く国際的、全人類的に通用すると言えよう。武道の心は、まさしく「和の心」と言い換えられる。それが最近の日本人からは減退している。

今年1月に中央教育審議会が

文部科学省に出した学習指導要領改訂に向けた答申などで、中学校保健体育の武道必修が2012年度から全面实施と決まった。柔道、剣道などの武道を通じて日本の伝統と文化を体験し、その中から「日本人の心」を学ぶ趣旨と言っている。

逆に関外で柔道の指導をするなど、その感覚はよく分かってもらえる。他国の着物である柔道着を身につけ、裸足で畳の上立ち、日本式の正座で礼をする。よく話すのが「道」の話だ。「武道は技とともに磨いた心を人生、日常生活に生かすのが大事。乗り物では席を譲り、困った人を助けることで武道家になる」。その説明に彼らは日本文化へのあこがれを示す。

我が国では近年、着物を着たり、畳に座ったりする機会が減り、華道や茶道、短歌や俳句などをしてたしなむ人も、多くはなくなった。そんな中で日本人が育んできた相手への思いやりや、感謝の気持ちを持つ若者が減ってしまっているように感じるのは、私だけだろうか。

武道必修化を喜んでばかりもいられない。なぜなら、教員の指導力向上や施設、用具等の整備といった課題があるからだ。武道の心を伝える指導者の養成が急務であり、そのためには研修会・講習会の開催や外部指導者を招くシステムの充実を図るなど、各武道団体が担うサポート体制が必須になるだろう。

また、負傷事故の防止も重要だ。日本スポーツ振興センターの昨年度の調査では、中学校柔道の部活動での事故8841件のうち武道場でのけがは36・3

%、体育館などが63・7%である。通常の授業では、4300件中、武道場27・8%、体育館72・2%になる。つまり、けがは専用の武道施設でない場所ですく起こることが分かる。

推測すると、畳を毎回敷く場合には準備運動の時間が少なくなる。畳と畳の間がずれて指などが入り込んでしまうケースもあるのだと思う。武道専用施設は単に技術を学ぶだけの場ではない。心を静める場であり、日本文化を感じる空間の役割も有する。中学校の武道場普及率は47%と聞く。ぜひ、その割合を上げてもらいたいものだ。

今の時代は、経済性や物質的なものが優先されるが、真の豊かさは本来心の中にあるものではないだろう。自国の文化を知り、誇りを持ってこそ、海外の人たちとの違いも受け入れられる。そんな人物が増える日本であって欲しい、と願う。